

韓国の寧越方言におけるアクセント性質

—— 上東邑を中心に ——

姜 英 淑

松 山 大 学
言語文化研究 第36巻第1号 (抜刷)
2016年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 36 No. 1 September 2016

韓国の寧越方言におけるアクセント性質

—— 上東邑を中心に ——

姜 英 淑

A qualitative difference of accents of the Yeongwol dialect in Korea
— Focus on Sangdon-eup —

KANG, Youngsuk

SUMMARY: The purpose of this study is to clarify the qualitative difference of the accents of the Yeongwol dialects in South Korea. In previous studies, Yeongwol-eup dialect of Yeongwol has a two-pattern accent system.

In this study, I focused on the accent of Sangdong-eup, a different region from previous studies. I analyzed the Deokgu-ri dialect as a $n+1$ accent system, in which one word-tone and n -number accent-kernels are distinguished. Moreover, I also interpreted the Kure-ri dialect as a three-pattern accent system, in which one accent-kernel and two word-tones are distinguished. Both dialects have the accent system in that both accent-kernel and word-tone coexist within the accent system of the noun. The differences between dialects are just the numbers of accent-kernel and word-tones.

キーワード：寧越上東邑，徳邱里，九来里，アクセント核，語声調，
句頭のイントネーション

目 次

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. 上東邑九来里のアクセント |
| 2. 音素体系及び調査方法 | 4.1 名詞の音調特徴 |
| 2.1 音素体系 | 4.2 句頭のイントネーション |
| 2.2 調査方法 | 4.3 名詞のアクセント体系 |
| 3. 上東邑徳邱里のアクセント | 5. アクセントの地理的分布 |
| 3.1 名詞の音調特徴 | 5.1 先行研究 |
| 3.2 名詞のアクセント体系 | 5.2 地理的な特徴 |
| | 6. まとめ |

1. はじめに

本研究は、韓国の江原道 (Kangwon-do) 地域のうち、寧越郡 (Yeongwol-gun) 上東邑 (Sangdong-eup) におけるアクセント特徴を明らかにし、そのアクセント体系を解明することが目的である。寧越郡は、寧越邑と上東邑の2つの邑 (町) と7つの面 (村) があり、上東邑は寧越郡の南東部にある鉸山都市である。1973年、面から邑に昇格し、人口は約1,200 (2012年基準) 人である。平野はほとんどなく、山に囲まれており、集落は谷を中心に展開されている。今回の調査地は、上東邑の徳邱里 (Deokgu-ri) と九来里 (Kure-ri) 2か所である。

寧越郡寧越邑のアクセントの先行研究については、5節で扱う。ちなみに、寧越上東邑におけるアクセント体系を扱った論文はまだない。

図1 韓国江原道



2. 音素体系及び調査方法

2.1 音素体系

この方言の音素体系は、母音は10母音体系で、長短の区別があり、子音は標準語と一致する。本稿では、以下の音素記号を用いて表記する。

- ・母音：/i, y, e, ø, ε, i, ə, a, u, o/ /i:, y:, e:, ø:, ε:, i:, ə:, a:, u:, o:/
- ・子音：/p, t, s, c, k, p', t', s', c', k', p^h, t^h, c^h, k^h, m, n, r, ŋ, h/
- ・半母音：/j, w/

/e/ と /ε/ を区別しているが¹⁾、語中では /ε/ に中和される。前舌円唇母音 /y/ と /ø/ が単母音として現れるが、/ø/ は、語中や子音の後では /ε/ に中和されるが、/we/ も随意的に現れる。

2.2 調査方法

名詞約 1,060 語¹⁾ に、付属語を付けた時の音調特徴を調べた（必要に応じて短い文も作ってその音調を調査した）。付属語は、アクセントを有しているものとそうではないものに分類できる。その特徴から、慶尚道諸方言に倣って自らのアクセントを持たず名詞に順接するものを一般付属語、アクセントを有するものを特殊付属語と呼ぶ。

- ・一般付属語²⁾：-i/-ka（～が³⁾）、-to（～も）、-e（～に）、-ita/-ta（～だ）
- ・特殊付属語：-k'aci（～まで）、-pota（～より）

特殊付属語の単独の発音は、-k'aci（まで）が³⁾ '高低'、-pota（より）が³⁾ '低高'³⁾ で発音される。

1) 九来里の細松（せそん）では、話者の事情により沢山の資料を調査することが出来ず、語例は約 340 語である。

2) 異形態は、名詞の音節構造によって自動的に決まる。

3) 単独では、第 2 音節が下降調の長母音 (F:) でも現れる（詳しくは、注 4 を参照）。

3. 上東邑徳邱里のアクセント

徳邱里は、元々は慶尚北道奉化郡（Gyeongsangbuk-do, Bonghwa-gun）の行政区域だったが、1963年に江原道寧越郡上東面に編入された。南の三洞山（Samdongsan）が慶尚北道との地理的な境界になり、その山の上に作られた集落と言う意味が地名の由来である。ちなみに、上東邑は寧越邑から東に、車で約1時間離れた所に位置している。

話者は以下の通りである。

- ・鄭鳳九（ちょんぼんぐ）…1946年生まれ、徳邱里の生え抜き（2代目）
- ・權英鳳（くおんよんぼん）…1950年生まれ、徳邱里の生え抜き

ここでは、より詳しく調査できた鄭鳳九氏の資料に基づいて記述し、權英鳳氏の資料は参考程度にとどめる。

3.1 名詞の音調特徴

この節では、名詞の単独形や付属語付きのアクセント特徴について詳しく述べる。ここで使用する記号を以下にまとめる。

- ・音調の上昇…[·音調の下降…] ·音節内の上昇…[[
- ・○数字と□数字…音調型の性質の違い ·数字…下降が起る音節

上記以外に、場合によっては高い音調をH、低い音調をLで簡略表記する。表1に徳丘里の名詞の音調型を示すが、1音節語のみは付属語 -i/-ka（～が）付きの音調を提示する。

①型は、最初の1音節が高く発音される特徴がある。1音節語は、単独では下降調で発音され、②の1音節語と区別されないが、一般付属語が付くと [pe]-ka で発音され、[pe-ka で現れる②型と区別される。ちなみに、文節末の高い音調は下降調が目立って現れるが、これは、この方言のみならず、慶尚道

表 1 名詞音調型の一覧

	1 音節	2 音節	3 音節	4 音節	5 音節
①	[pɛ]-ka 梨	[k'a]si 棘	[cɛ]c'iki くしゃみ	[sim]surc'ɛŋi 意地悪	[coŋ]ipihenki 紙飛行機
②		ka[ci] 茄子	soŋ[k'u]rak 指	ta[ri]micir アイロン掛け	ke[ku]riheəm 平泳ぎ
③			k'oŋna[mur] 豆もやし	murku[na]mu 逆立ち	hepa[ra]kis'i ひまわりの種
④				kurena[ru] 頬ひげ	cakina[pə]ci 叔父
⑤					pananau[ju] バナナ牛乳：商品名
②	[pɛ-ka お腹	[kaci 枝	[nunt'oŋ]ca 瞳	[hara]pəci 祖父	[hara]pəci-ta* 祖父だ
	[pɛ:-ka 倍	[sa:ram 人	[ko:ku]ma 薩摩芋	[ø:har]məni 母方の祖母	[ø:ha]rapəci 母方の祖父

* 語例未発見のため、「4音節語+付属語」付きを代用

方言でも広く見受けられる音声的な現象であり、この方言でも音韻的な意味は持たない。以下の音調型におけるこの種の下降調の表記は省略する。

(1) [pɛ (梨) [pɛ]-ka (梨が) [pɛ]-ta (梨だ)

これに対して、(2)のように、特殊付属語が付くと付属語のアクセントが活きる。

(2) [pɛ (梨) pɛ-[k'a]ci (梨まで) pɛ-po[ta (梨より)⁴⁾

4) L-LH 以外に、L-LF: とも発音される。-po[ta (～より) は、単独では随意的に、LF: でも発音されるが、これは、この助詞が3音節に由来するものだからである。LF: は、本来 LHL で発音されたものが音節の縮約により長母音化して現れたものと考え、音韻的には LHL と見るべきである。そして、L-LF: は助詞のアクセントが生きた音調型であると見る。この助詞の由来については李基文 (1998: 226) に記述があり、動詞 'po- (見)' から来たもので、'-potaka' が古い形であるとされ、福井玲 (2003: 282) にも同様の指摘がある。アクセント現象については姜英淑 (2005, 2008) に詳しく述べている。

この現象は、ほかの慶尚道方言でも広く見られるものであり、「語末核型+有核要素=後部の核の位置」という語末核型規則によるものと同じである⁵⁾。2音節以上の語には、付属語が常に低く付く。

(3) [ka]si	[ka]si-ta	[ka]si-k'aci
(棘)	(棘だ)	(棘まで)
[ce]c ^h iki	[ce]c ^h iki-ta	[ce]c ^h iki-k'aci
(くしゃみ)	(くしゃみだ)	(くしゃみまで)
[sim]surc'eŋi	[sim]surc'eŋi-ta	[sim]surc'eŋi-k'aci
(意地悪)	(意地悪だ)	(意地悪まで)
[coŋ]ipihɛŋki	[coŋ]ipihɛŋki-ta	[coŋ]ipihɛŋki-k'aci
(紙飛行機)	(飛行機だ)	(飛行機まで)

②型は、第2音節のみが高く発音される特徴がある。語末が高い2音節語は、一般付属語は名詞のアクセントに順接する。

(4) ka[ci (茄子)	ka[ci]-ka (茄子が)	ka[ci]-ta (茄子だ)
----------------	-----------------	-----------------

これに対して、特殊付属語が付くと「語末核型規則」により付属語のアクセントが活きる。

(5) ka[ci (茄子)	kaci-[k'a]ci (茄子まで)	kaci-po[ta (茄子より)
----------------	----------------------------	--------------------------

3音節語以上では、すべての付属語は名詞のアクセントに順接し、低く現れる。

5) 李連珠 (2002: 118) は、大邱方言におけるこのような現象を「独立した句単位に置いて、句末核はない」というアクセント制約による現象と解釈している。

(6) soŋ[k'u]rak ⁶⁾	soŋ[k'u]rak-ita	soŋ[k'u]rak-k'aci
(指)	(指だ)	(指まで)
ta[ri]micir	ta[ri]micir-ita	ta[ri]micir-k'aci
(アイロン掛け)	(アイロン掛けだ)	(アイロン掛けまで)
ke[ku]riheəm	ke[ku]riheəm-ita	ke[ku]riheəm-k'aci
(平泳ぎ)	(平泳ぎだ)	(平泳ぎまで)

③型は、第3音節のみが高く発音される特徴がある。語末の高い3音節語は、一般付属語が名詞に低く付き、特殊付属語が付くと付属語のアクセントが活きる。

(7) k'oŋna[mur] ⁷⁾	k'oŋna[mur]-ita	<u>k'oŋnamur-[k'a]ci</u>
(豆もやし)	(豆もやしだ)	(豆もやしまで)

4音節以上の語には、すべての付属語は名詞のアクセントに順接する。

(8) murku[na]mu	murku[na]mu-ta	murku[na]mu-k'aci
(逆立ち)	(逆立ちだ)	(逆立ちまで)

④型は、第4音節のみが高く発音される特徴がある。語末の高い4音節語は、特殊付属語が付くと付属語のアクセントが活きる。その他のすべては、付属語は低く付く。

(9) kurenna[ru]	kurenna[ru]-ta	<u>kurrenaru-[k'a]ci</u>
(頬ひげ)	(頬ひげだ)	(頬ひげまで)

5音節以上の語には、すべての付属語が低く付く。

6) 1音節の付属語付きでは、下降の遅れによって LLH-L とも現れる。

7) 語末の H が1つ前にずれて LHL とも現れるが、付属語付きでは本来の音調型が現れる。

- | | | | |
|------|----------------------|-------------------------|----------------------------|
| (10) | cakina [pə]ci | cakina [pə]ci-ta | cakina [pə]ci-k'aci |
| | (叔父) | (叔父だ) | (叔父まで) |

⑤型は、第5音節のみが高く発音される特徴があり、語末の高い5音節語は、一般付属語は低く、特殊付属語は付属語のアクセントが活きる。

- | | | | |
|------|--------------------|------------------------|---------------------------|
| (11) | pananau [ju | pananau [ju]-ta | pananauju -[k'a]ci |
| | (バナナ牛乳) | (バナナ牛乳だ) | (バナナ牛乳まで) |

②は、高く始まり第2音節まで高く発音され、それ以降は低くなるという特徴が文節単位に決まっている。そのため、付属語が付いてもこの特徴は保たれる。

- | | | | | |
|------|-------------|----------------|-------------------|------------------|
| (12) | [pɛ | [pɛ-ta | [pɛ-k'a]ci | [pɛ-po]ta |
| | (お腹) | (お腹だ) | (お腹まで) | (お腹より) |
| | [kaci | [kaci]-ta | [kaci]-k'aci | [kaci]-pota |
| | (枝) | (枝だ) | (枝まで) | (枝より) |
| | [nunt'oŋ]ca | [nunt'oŋ]ca-ta | [nunt'oŋ]ca-k'aci | [nunt'oŋ]ca-pota |
| | (瞳) | (瞳だ) | (瞳まで) | (瞳より) |
| | [hara]pəci | [hara]pəci-ta | [hara]pəci-k'aci | [hara]pəci-pota |
| | (祖父) | (祖父だ) | (祖父まで) | (祖父より) |

1音節語は、単独では下降調で発音されるが、付属語が付いて文節の長さが3音節以上になるとHHL…で現れ、型の特徴がはっきりと現れる。

1音節語の中には、一般付属語 -e (～に) が付くとH-Lで現れるものが語によって決まっている。この現象も他の方言でも広く見受けられるものである⁸⁾

- | | | | |
|------|----------|--------------|-----------------|
| (13) | [pɛ (お腹) | [pɛ]-e (お腹に) | [pɛ]-eto (お腹にも) |
|------|----------|--------------|-----------------|

②の音調型は、HHL…で現れるのが原則であるが、文節の長さが4音節以

8) 中期朝鮮語においても、これと平行する現象があり(13)はその反映であると考えられる。

上になると、第2音節の後で現れるべき下降が、第3音節の後に現れることもある。この現象は下降の遅れによるもので、音韻的な対立ではない。

また、2音節語以上では第1音節の高い音調がやや低めに発音されることもある⁹⁾。この場合は、前に [it]t'a (ある)/[ɔ:pt'a (ない)/[ne: (私の) などをつけて確認をするとアクセントの切れ目により名詞の語頭音調が確認できる¹⁰⁾

この型には、第1音節が長母音で現れるものがあるが、長母音以外の音調の特徴は(12)と全く同じである。この長母音は分節音の対立によるものであり、アクセントによって長く実現されるものではないと見る。

(14)	[pe:	[pe:-ta	[pe:-k'a]ci	[pe:-po]ta
	(倍)	(倍だ)	(倍まで)	(倍より)
	[sa:ram	[sa:ram]-ita	[sa:ram]-k'aci	[sa:ram]-pota
	(人)	(人だ)	(人まで)	(人より)
	[ko:ku]ma	[ko:ku]ma-ta	[ko:ku]ma-k'aci	[ko:ku]ma-pota
	(薩摩芋)	(薩摩芋だ)	(薩摩芋まで)	(薩摩芋より)
	[ø:har]mæni	[ø:har]mæni-ta	[ø:har]mæni-k'aci	[ø:har]mæni-pota
	(母方の祖母)	(母方の祖母だ)	(母方の祖母まで)	(母方の祖母より)
	[ø:ha]rapæci	[ø:ha]rapæci-ta	[ø:ha]rapæci-k'aci	[ø:ha]rapæci-pota
	(母方の祖父)	(母方の祖父だ)	(母方の祖父まで)	(母方の祖父より)

1音節語の場合は、単独では上昇調の長母音で発音されるが、文節単位が2音節以上になると高平らな長母音で発音される¹¹⁾。文節全体で‘HHL...’で現れるのが原則であるが、文節の長さが4音節以上になると、下降の遅れが生じ、第3音節まで高く発音されたり、第3音節内部で下降が起きたりする。特に、-po[ta (～より) は自らのアクセント特徴が現れ、名詞に付くと2単位形で現れることが多い。

9) 第1音節がやや低めに発音される場合は、下降の遅れは現れない。

10) 語頭音節の音調を確認する方法は、まだ確実に決まったものがないが、名詞の前に存在詞を含む用言を付けるとアクセントの切れ目が現れやすいため、語頭音節の音調確認が容易である。

3.2 名詞のアクセント体系

3.1節で述べた付属語が付いた時の音調特徴から、①型～⑤型は、単語を単位にアクセント核の位置が有意義なアクセント型である。②は、文節を単位にその全体に「HHL…」の音調パターンが被さっているものである。

- | | | | | |
|------|----|------------|----------------|--------------------|
| (15) | i | ka[ci (茄子) | ka[ci]-ka (～が) | kaci-[k'a]ci (～まで) |
| | ii | [kaci (枝) | [kaci]-ka (～が) | [kaci]-k'aci (～まで) |

(15)は、単独では共に語末が高く、一般付属語が付くと両者共に付属語が低くなる。これに対して、特殊付属語が付くと(15 i)は語末核型規則が働き、助詞のアクセント位置が活きる。これに対して(15 ii)は、語末核型規則による現象が起こらず、後部が低くなり‘HLL’が保たれる。これは、‘枝’の語末にある下降は核によるものではないことを意味する¹²⁾つまり、語末核型ではないため「語末核型規則」も働かない。(15)のような付属語付きの違いは両者のアクセント性質の違いに起因するものであり、常に‘HHL…’を保っている②を、文節に‘HHL…’が形(声調)となって被さっているものと見て語声調と解釈する。

上東邑方言の名詞のアクセント体系を以下の記号を使い、表2にまとめる。

- ・○…任意の音節
- ・]…アクセント核
- ・[…語声調における上昇
- ・]…語声調における下降

11) 具体的には、軽い上昇調も現れたりするが、1音節単独の発音のようにはっきりした上昇調ではない。

また、2音節語に属す ke:mi (アリ) と kə:ci (乞食), me:mi (セミ) などは、単独では‘RL’で発音され (R: LH の rising glide), 他の2音節語の sa:ram (人) とは明らかに音調型や語頭母音の長さが異なる。これらの単語は、本来は LHL の3音節由来のものが音節の縮約により語頭が長母音化したものと考えられ、RLはその名残だと解釈できる。しかし、付属語が付くと RL-L ではなく、H:H-L で現れ、音調型及び語頭母音の長さが sa:ram-i (人が) と同じである。これは、他の語頭長母音を有する例からの類推より、②の特徴で現れるものと見る。よって、これらの例は、2音節語の②と分類する。

12) この違いをゼロアクセント・無核型等として解釈する立場もあるが、これもやはり①型～⑤型とは性質が異なる点について音韻的な解釈を施したものである。

表2 徳邱里方言の名詞アクセント体系

	1 音節	2 音節	3 音節	4 音節	5 音節
①	○]	○]○	○]○○	○]○○○	○]○○○○
②		○○]	○○]○	○○]○○	○○]○○○
③			○○○]	○○○]○	○○○]○○
④				○○○○]	○○○○]○
⑤					○○○○○]
②	[○]	[○○]	[○○]○	[○○]○○	[○○]○○○

①型～⑤型は、核の位置により対立するものであり、②は、文節全体に‘[○○]○…’の声調（形）が被さった語声調である。語声調においては、第2音節で必ず下降が現れるため、‘どこで’と言う位置は有意味である。

以上、徳邱里方言は、n個のアクセント核と一つの語声調を併せ持っている体系である。

4. 上東邑九来里のアクセント

本節では、徳邱里の北に位置し、太白（Taebae）に隣接する九来里のアクセントを取り上げ、その特徴や、体系を記述する。話者は、以下の通りである¹³⁾

・千東基…1945年生まれ、九来里の細松（せそん）の生え抜き（3代目）

話者は文字が読めなかったため、間接質問法や直接質問法などを使い、方言形を引き出し、必要項目を発音してもらった。沢山の資料の調査には至らなかったが、必要項目は収集できたため、全体の体系を概観する。

13) 他に、千東基氏の奥さんにも確認調査をした。

4.1 名詞の音調特徴

この節では、名詞の単独形や付属語付きのアクセント特徴について詳しく述べる。表3に、名詞の音調型を示すが、1音節語のみは付属語 -i/-ka (～が) 付きを示す。記号は、3.1節と同様の意味で用いる。

①型は、第1音節のみが高く発音される。語末が高い1音節語は、特殊付属語が付くと「語末核型規則」により付属語のアクセントが活きる。

- (16) [tar]¹⁴ [tar]-ki [tar]-kita¹⁵ **tar-[k'a]ci**
 (鶏) (鶏が) (鶏だ) (鶏まで)

2音節以上の語は(17)のように、単独でも付属語付きでも第1音節が高く発音される。

- (17) [sa]kwa [sa]kwa-k'aci
 (林檎) (林檎まで)
 [ə]kimni (奥歯) [ə]kinnita (奥歯だ)

表3 名詞の音調型一覧

	1音節	2音節	3音節	4音節	5音節
①	[tar]-ki 鶏	[sa]kwa 林檎	[ə]kimni 奥歯	[ə]kimni-ta* 奥歯だ	*
②	[tar-i] 月	[hac'o] 学校	[opp'a]mi フクロウ	[kapu]ciki ダニ	[kapu]ciki-ta* ダニだ
	[pjə:r-i] 星	[o:ri] アヒル	[k'o:njaŋ]i 猫	[ø:nsoŋ]k'urak 左手の指	[ø:ha]rapəci 母方の祖父
-②		kun[tu] ブランコ	som[me]tu 手首	tek'o[pa]ri キセル	totokk'o[njaŋ]i 野良猫

*単独の語例は未発見

14) 形態音韻論的には、/tark/ である。

15) 下降の遅れによる [tar-ki]ta とも発音される。

ただし、付属語が付くと下降の遅れにより‘HHL...’も随時現れる。この現象は、①型が後述する②と対立を失いつつあるためと考える。しかし、4音節語以上は、単独の語例がまだ見つかっておらず、詳しい調査が必要であるが、3節の徳邱里の①型に属する例がこの方言では②ではなく後述する-②で現れる¹⁶⁾この点、(18)で述べるが、4音節語以上においては②が-②へ合流が進んでいる可能性がある。

②は、文節を単位に、最初の2音節が高く発音され、それ以降は低くなる特徴がある。

(18)	[tar	[tar-i]ta	[tar-k'a]ci
	(月)	(月だ)	(月まで)
	[hac'o	[hac'o]-ta	[hac'o]-k'aci
	(学校)	(学校だ)	(学校まで)
	[opp'a]mi	[opp'a]mi-ta	[opp'a]mi-k'aci
	(フクロウ)	(フクロウだ)	(フクロウまで)
	[kapu]ciki	[kapu]ciki-ta	
	(ダニ)	(ダニだ)	

2音節語の単独形は、HL¹⁷⁾で現れることもあるが、随意的である。これは、この方言では、文節末の高い音調を避けようとする働きがあり、‘HH→HL’へ中和が起こり始めているものと見る。4音節語以上は、1例を除き、語頭長母音の例である。例を増やす必要があるが、3節の徳邱里方言で②に属する例が、この方言では-②で現れていることからこの方言の4音節語以上は、語頭長母音の例を除き、-②へ合流が進んでいる可能性がある。

この型には、第1音節に軽い上昇調の長母音を有する例があり¹⁸⁾、付属語が

16) 2音節語の中にも徳邱里の①型がこの方言では-②で現れるものがある。主に(C)V₁(C)V₂の構造で、V₁は/a/, V₂は/i(y)/である。

17) 詳しくは、HMまたはHLである。

18) 高平らな長母音も随意的に現れるが、特に、強調した発音では、高平らに現れる。

付くと長母音は高平らに発音される。この長母音は分節音によるものであり、アクセントによるものではない。

- | | | |
|----------------------------|-----------------------------------|---------------------|
| (19) [pjə:r (星) | [pjə:r-i (星が ^s) | [pjə:r-i]ta (星だ) |
| [o:ri ¹⁹⁾ (アヒル) | [o:ri]-ka (アヒルが ^s) | [o:ri]-ta (アヒルだ) |
| [k'o:njaŋ]i (猫) | [k'o:njaŋ]i-ka (猫が ^s) | [k'o:njaŋ]i-ta (猫だ) |
| [ø:nson]k'urak (左指) | [ø:nson]k'ura-kita (左指だ) | |
| [ø:ha]rapəci (母方の祖父) | [ø:ha]rapəci-ta (母方の祖父だ) | |

－②は、次末音節のみが高いという特徴が、文節を単位に決まっているものである。より具体的には、次末音節に向かって徐々に上がり、antepenultimate から高く発音されることもある。付属語が付いて文節が長くなってもこの特徴は保たれる。2音節語²⁰⁾は、単独では、単位が短いため、－②の特徴が現れないが、文節が3音節以上になると型の特徴がはっきりと現れる。特殊付属語付きは、(16)のような語末核型規則の特徴とも見えるが、一般付属語に属す -esə(～から)付きも LL-HL になるため、文節の特徴と捉えるべきである。3音節語以上では常に文節全体で penultimat が高く発音される。

- | | | |
|----------------|-------------------|----------------------|
| (20) kun[tu | kun[tu]-ta | kuntu-[k'a]ci |
| (ブランコ) | (ブランコだ) | (ブランコまで) |
| som[me]tu | somme[tu]-ta | sommetu-[k'a]ci |
| (手首) | (手首だ) | (手首まで) |
| tek'o[pa]ri | tek'opa[ri]-ta | tek'opari-[k'a]ci |
| (キセル) | (キセルだ) | (キセルまで) |
| totokk'o[jaŋ]i | totokk'ojaŋ[i]-ta | totokk'ojaŋi-[k'a]ci |
| (野良猫) | (野良猫だ) | (野良猫まで) |

19) 単独形で HM・HL とも現れるが、文節末の高い音調を避けるという働きによるものと見る。

20) 文節末の高い音調を避ける働きによる中和 (LH→HL) は見受けられないが、これは①型との区別を保つためだと見る。

以上から、上東邑九来里のアクセントは、名詞単独では3音節語までは3つの型が対立を成しており、4音節語以上も、付属語付きの音調型を考慮すると、3つの型が対立を成している可能性は高い。

4.2 句頭のイントネーション

この方言は、4.1節で記述したアクセント特徴が単語または文節に決まっているが、それとは別に、1つの句が {○[○…]○} で現れる特徴がある²¹⁾。これを句頭のイントネーションと呼ぶ。

(21) i . [ha]nir (空)	ii . [ha]nir-to (空も)	iii . ha[ni]-re (空に)
[mur (水)	[mur-to (水も)	mu[re]-sə (水で)
[a:nke (霧)	[a:nke]-to (霧も)	an[ke]-ka ²²⁾ (霧が ²³⁾)
mu[k'u (大根)	mu[k'u]-to (大根も)	mu[k'u]-ka ²³⁾ (大根が ²³⁾)

(21)は、それぞれ i) が名詞単独、ii) が一般付属語付き、iii) は句頭イントネーションの音調型である。iii) のイントネーションは、句頭を表す機能を持つと解釈するが、フォーカスが置かれた場合は、現れない。(21 i) と (22 ii) は、それぞれ単独と強調の意味を持っている付属語付きの発音である。名詞の単独形と助詞付きの単独形は、それ自体にフォーカスを置いて発音するもので、この場合には句頭のイントネーションが現れず、本来のアクセントが現れる。これに対して (21 iii) は、句 (文) の始まりであり、そこにフォーカスが置かれてはならず、句 (文) が続く時に現れる。この句頭のイントネーションは自然会話の中でよく現れるものであり、今後の詳しい調査が必要である。

21) このような特徴を、「接続形」の音調と解釈する立場もある (表5を参照)。

22) 低く発音される場合は語頭の長母音は短くなる。

23) -[2]は、本来の音調特徴から句頭のイントネーションの判断が難しいが、文節が4音節以上では、本来の '○…[○]○' ではなく、第2音節からはっきりと上昇が聞こえる。この音調特徴は、句頭のイントネーションの現れであると見る。

4.3 名詞のアクセント体系

九来里のアクセント体系は、1つのアクセント核型と2つの語声調が対立を成している体系である。用語は3.2節と同じ意味で用いる。

①型は、第1音節に核があるもので、語末核の1音節語は「語末核型規則」の特徴が現れる。

②は、文節を単位に[○○]○…の声調（形）が被さっている語声調である。4音節語以上の例は、ほとんどが語頭に長母音を有するものである。

-②は、文節を単位に○○…[○]○の声調（形）が被さっている語声調である。

表4 九来里方言の名詞のアクセント体系

	1音節	2音節	3音節	4音節	5音節
①	○]	○]○	○]○○	○]○○○	-
②	[○]	[○○]	[○○]○	[○○]○○	[○○]○○○
-②		○[○]	○[○]○	○○[○]○	○○○[○]○

5. アクセントの地理的分布

5.1 先行研究

前節までは、寧越郡上東邑の徳邱里と九来里のアクセント特徴や体系について述べた。本節では、寧越郡の他の地域のアクセントに関する先行研究を紹介する。

孫在賢（2005, 2009, 2010）は、寧越邑のアクセントを記述し、2つの型が対立を成し、言い切り形と接続形の区別があるとされる。表5に、原文の記号等を一部変更し、3音節語までの音調型を示す。

- ・●…高く現れる音節 ・●:…長母音音節 ・▶…高く現れる助詞
- ・○…低く現れる音節 ・▷…低く現れる助詞 ・(下)…下降調
- ・a…単独言い切り形 ・b…助詞付き言い切り(網掛け)
- ・c…助詞付き接続形 ・②…第2音節に核が有る型
- ・-②…末位から2番目の音節に核が有る型

表4の九来里アクセントと対照してみると、①型が②と対立を失った体系と見られる(表5の②)。また、提示の例から、表4の②に属した例は語頭に長母音例以外は-②で現れている(表5の-②)。音調型は、-②(表5の-②型)の具体音調が異なる。

表5 寧越邑のアクセント体系

		2005			2009・2010		
		1	2	3	1	2	3
②	a	●:	●:○	●:●○	●:	●:○	●:●○
	b	●:▷	●:●▷	●:●○▷	●:▷	●:●▷	●:●○▷
	c	●:▶	●:●▷	○●●▷	●:▷	●:●▷	○●●▷
	a	○	●○	●●○	●(下)	●○	●●○
	b	●▷/○▷	●●▷	●●○▷	●▷/○▷	●●▷	●●○▷
	c	○▶	●●▷	○●●▷	●▷/○▷	●●▷	○●●▷
-②	a	○	○●	○●○	●(下)	○●(下)	○●○
	b	○▶	○●▷	○●●▷	○▶	○●▷	○●●▷
	c	○▶	○●▶	○●●▷	○▶	○●▶	○●●▷

伊藤貴祥(2015)は、金筐(キムサッカッ)里の音調型を扱っているが、この研究は体系化を図ることが目的ではないため、音節別のアクセント型は提示されていない。取り上げられている3音節語の音調型から4つの型が対立を成している。これは、3節で述べた徳邱里方言の音調型の対立数と同様であり、地理的に近いことから徳邱里のアクセント体系に近い可能性がある。

5.2 地理的な特徴

寧越郡のアクセントは寧越邑の2型、上東邑の九来里が3つのアクセントが対立する3型²⁴⁾（1つの核型と2つの語声調）アクセント体系であり、徳邱里は $n+1$ （ n 個の核型と1つの語声調）の対立を持つ体系である。

徳邱里は現在、行政区域が寧越郡に分類されているが、本来は慶尚北道の奉化郡に属していた。実際、奉化郡のアクセント体系は徳邱里のアクセントと同様に、 n 個のアクセント核型と1つの語声調が対立を成している（姜英淑2011）。

九来里の音調特徴は、-㉒型が寧越邑よりは地理的に近い徳邱里の音調特徴と似通っている。

6. ま と め

以上、寧越郡の上東邑の徳邱里と九来里のアクセント体系について考察した。結果、徳邱里は n 個のアクセント核型と1つの語声調が対立を成しており、九来里は1つのアクセント核型と2つの語声調が対立を成していることが分かった。本来慶尚北道に属していた徳邱里は隣接する奉化方言と同じアクセント特徴であり、地理的に近い九来里も徳邱里に類似する音調特徴が現れる。

今後、九来里の資料を増やし、4音節語以上のより詳しいアクセント調査が必要である。

[付記]

本稿は、科学研究学術研究助成基金助成金若手研究（B）「韓国語諸方言におけるN型アクセントの実態調査研究」（課題番号：25770166）や平成27年度松山大学特別助成研究による成果の一部である。

24) 上野善道（1984）の意味とは異なる。

参 考 文 献

- 李連珠 (2002) 「韓国語大邱方言アクセントの音韻論的解釈」『東京大学言語学論集』21 東京大学文学部言語学研究室：103-121
- 上野善道 (1984) 「N 型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題 第2巻 記述的研究編』明治書院：167-209
- 姜英淑 (2005) 「韓国語の東部慶尚南道方言のアクセント体系」『東京大学言語学論集』24：79-97
- _____ (2008) 「韓国語慶尚南道諸方言のアクセント研究」東京大学人文社会系研究科言語学専門分野博士学位論文
- _____ (2011) 「韓国語の奉化（ボンフワ）方言のアクセント」第25回日本音声学会全国大会予稿集：37-42
- 孫在賢 (2005) 「韓国語江原道方言のアクセント」日本言語学会第131回大会予稿集：219-224
- _____ (2009) 「韓国語2型アクセント」第23回日本音声学会全国大会予稿集：63-68
- _____ (2010) 「N 型アクセントの実証的研究－韓国語の二型アクセント－」『日本研究』第43号：353-365
- Fukui, Rei (2003) 'Pitch accent system in Korean' in S. Kaji, ed. *Proceedings of the Symposium Cross-linguistic Studies on Tonal Phenomena, ILCAA, Tokyo* : 275-286
- 李基文 (1998) 『국어사개설 (国語史概説)』太学社
- 伊藤貴祥 (2015) 「東南方言 声調의 地域的分化研究 (東南方言声調の地域的分化研究)」ソウル大学大学院言語学科言語学専攻博士学位論文